私たち「蓋女」なんです

マンホールのフタに魅せられた女性を「蓋女（ふたじょ）」と呼ぶそうな。なんでまたフタ？というなかれ。神戸でこの秋、急増する愛好家が集まるマンホールサミットも開かれる予定だ。

秋に神戸でサミット

中田芙紗さん入魂の拓本の数々＝奈良県宇陀市

マチカネワニをモチーフにしたフタ。池上和子さんはカメラをいつも持ち歩く＝大阪府豊中市

「路上で拓本　命がけ」

「路上で拓本。命がけよ」。奈良県宇陀市の中田芙紗さん(79)は15年で「マンホール蓋拓本」150点を集めた。もともと各地の碑を拓本に採っていたが、自宅前にあったツツジが描かれたフタに目をとめたのがきっかけに。

和紙をかぶせて水でぬらし、手ぬぐいをのせてたたく。凹凸が出たら、乾くか乾かないかのうちにタンポという道具に油墨をつけてポンポンポン。ざっと30分かかる。重い道具をスーツケースに詰め、一人で採集の旅へ。「この絵は何をデザインしたの？と謎解きが楽しい。物語がある」

東京都のグラフィックデザイナー、傭兵鉄子（ようへい）さんは学生時代から20年余の蓋女。「踏まれて摩耗した質感がかっこいい」。熱愛するのは戦前からあるフタで、地味なほど萌（も）える。「空襲を生き抜いた歴史の生き証人なんです」

実在の風景を描いたアニメに出てくるフタにも注目し、現場に赴くこと数十回。例えば、東京が舞台の人気アニメ「ラブライブ！」によくマンホールが登場する。見当を付けて足を運んだ場所で同じフタがあったら、「やったー！」。

大阪府豊中市の池上和子さん(68)の蓋女歴は13年に及ぶ。43都道府県で3千枚の写真を撮り、「デザインマンホール100選」という本にまとめた。目当てのフタの上に駐車している運転手を探して車を移動してもらったり、偶然目に飛び込んできたフタに惹（ひ）かれて乗車中のタクシーを止めたり。「これぞと思ったら諦めません」と勇ましい。

今年3月に都内で開かれた第2回マンホールサミットには、撮影王道派やアニメ派など各分野の蓋女が勢ぞろいした。サミットは、男性ファンや業界関係者の参加を見込んで去年始まったが、第2回大会では参加者約300人の4割を女性が占めた。

サミットの仕掛け人で、下水道関連団体でつくる下水道広報プラットホームの藤原昇さん(72)は、「去年は予想以上に女性が目立った。こんなにフタを愛する女性がいたことは発見だったし、愛し方も様々でびっくり」。神戸サミットは食の関西にちなみ、神戸牛をマンホールのフタで焼いて食べる催しなども企画しているという。

（河合真美江）

上大阪城＝大阪市　下ゲゲゲの鬼太郎＝鳥取県境港市（いずれも池上和子さん撮影）